
水月学園ハロウィンパーティー

にゃんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水月学園ハロウィンパーティー

【Nコード】

N9513C

【作者名】

にゃんこ

【あらすじ】

みなさん、ハロウィンですね。なので特別短編です。ある学園に通うカップルのハロウィンパーティーでの出来事を書いてみました。いたって平凡なカップルのいたって平凡な日常なのでシリアス、ギヤグなど、過度な期待しないでください。あと、部屋は明るくして、PCから3m離れて（ry

（前書き）

みなさん、ハロウィンですね。なので特別短編です。
ある学園に通うカップルのハロウィンパーティーでの出来事を書いてみました。

いたって平凡なカップルのいたって平凡な日常なのでシリアス、ギヤグは期待しないでください。

あと、部屋は明るくして、PCから（ry

さて、今日は10月31日。

今日はオレの住む水月島の水月学園で1日かけてあるパーティーが行われる。

パーティーとはいってもほとんど文化祭のようなノリだけだな。

で、何のパーティーかというと日付を見て気づくだろうがハロウィンパーティーだ。

別にオレはカトリックどころかキリストにも興味はないのだが

色々騒ぎの好きな(多分そうだろう)学園長がおもしろいからという理由で始めたんだろう。

他にも冬休み中であるはずの12月24日にはクリスマスパーティーが開かれる。

で、ハロウィンパーティーとはどんなパーティーかと言うと……

「ねえねえ一緒に回らない？」

と椅子に座って外を眺めながら読者にどうのこうのと解説してるオレに話しかけてきたのは同じクラスのスピカ。

アホ毛の目立つクリーム色の髪ロングヘア、そしてエメラルドのような色をした瞳の女だ。

ちなみに説明すんのもこっ恥ずかしいがオレの彼女だ。

まあなれそめまで説明する必要はないだろう。

そっぴやオレの自己紹介がまだだったな。

オレの名前は浅井 昴。読み方をミスるヤツが多いので忠告しておくが名字はあ・ざ・いだ。

水月学園2年1組1番。はい、自己紹介終了。

「ん？ああ、そうだな」

外の様子を見ながらゆっくりと腰を上げオレを見ているスピカは黒い猫耳に猫のような尻尾があって服は黒づくめだ。

そのせいかクリーム色の髪が目立つ。

ついでに続きを説明しておこうどんなパーティーかと言うと仮装パーティーだ。

それぞれ不吉な怪物なりなんなりに仮装し中庭や校庭で模擬店があったり

体育館で舞踏会があったりしてそれを回るなりして好きなように過ごすのだ。

ちなみにオレはドラキュラで主にマントを羽織っているだけだ。

さて、廊下に出てみればいるわいるわ化け物共が。

ただの白い穴あきの布を被っただけの幽霊にカボチャ男にオレのようなドラキュラ。

模擬店は主に外でやってるのでローファーに履き替え校舎を出る。

模擬店の規模は文化祭と同じなのだがさすがはハロウィン、単なる固定観念からかカボチャやお菓子の模擬店ばかり。

昼飯はどうすんだ。カボチャか？

なんて思ってる間に――の形をした大きなペロペロキャンディーが売ってある店へ走っていく黒猫が。

オレも店の前までたどり着くと「おごってほしいな」と言わんばかりのキラキラした眼でこちらを見てくる。

早速奢れと。

「しゃあねえな………2本くれ」

「ありがと」

結構大きかったので値段もそれ相応だ。

「ほれ」

左手に持っているキャンディーを1本渡す。

「わあ」

夢にまで見たって感じたな。

自分のキャンディーをしばらくうつとりと眺めた後、オレのキャンディーを見て

「Trick or Treat♪」

と空いた左手を差し出して言ってきた。

「ぬあ」

思わず声を上げてしまった。

奢ってやった上、もう1本寄越せと。

「自分の金で買えよ」

「Trick or Treat♪」

スピカはそのままう一度言う。

「もっかい奢ってやるから」

そうするとオレの財布が厳しくなるのだが。

悪かったな貧乏で、オレはそんなに金持たねえんだよ。

「Trick or Treat♪」

スピカは左手を差し出したままだ。

つまり、オレのをくれと。

「それは無理だ」

断るとなんかされそうだがそれは覚悟の上だ。

「うつ・つく・うええええん・・うわああん!!」

「な!!??」

こんなに人のいる所で泣き出すのか!?

「どうしたの?」

「あいつが泣かしたんだろ」

「うつわ、サイテー」

くっ・・視線が辛い。

「わあったわあった。オレのもやるから泣くな!」

「わーいっ」

ピタッと泣きやみひったくるようにオレのキャンディーを奪い取ると嬉しそうに舐め始める。

ぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろぺろ

ペロペロペロペロペロ

ペロペロペロペロペロペロペロペロペロペロ……

「とりあえず、どつか座ろうぜ……」

しばらくして中庭にあるベンチに座り、スピカが舐め終わるのを待つことにした。

「おっこんなトコにいたのか」

ぽーっと空を見上げていると聞き覚えのある声がした。

「ん……ああ山口か」

顔を前に向けると尖った茶色い耳に長い口を持った（おそらく）狼男に扮した山口信助と

魔女に扮した山口の彼女である辻百合花がいた。

4人と同じクラスだから結構話もする。

「スピカ泣かせたんだって？」

「うっ」

『う』とも『え』ともつかない呻き声を上げた。

「こいつが嘘泣きしたんだよ」

「えへ」

「えへ、じゃねえ」

こいつ、悪魔だな。

「午後から体育館で舞踏会があるんだってよ」

そっぴやそんな事があるって張り紙にあったな。

「あ、そう。で？」

「それまで一緒に回らねえか？」

「……スピカは？」

「私は……ペロ……別にいいよ……ペロペロ……」

「ならオレもいい」

「筋肉自慢のフランケンと腕相撲……ねえ……」

「くっ……」

「昂〜ガンバレ〜」

「だあああっ！！……勝てるか！こんな筋肉野郎に！」

「じゃ、信助とやってみたら？」

「………っ………っしやああ！！」

「やったー！昂の勝ち〜！」

「ま、勉強で勝ってねえからな。これぐらいはな」

「不甲斐ないわね」

「申し訳ないです……」

「やっぱり昼飯はカボチャ絡みか」

「カボチャパイ。これも結局は菓子部類に入るよな」

「いらないなら私がもらうわよ？」

「いいえいただきます」

「魔女の占いの館だつて！入ってみよ」

「……ん………男性の方、あなたは明日バナナで滑るでしょう
んなバナナな。」

『ドクターイソマツの怪しげな実験室』

「「「「じゃんけんぽん！……」」」」

「山口、やはりお前はギャグ担当だな」

「うえ……これ飲むのか？」

山口の持つ透明なコップにはデロツとした緑色の準液体物が入っている。

「「飲むめ」飲むめ」」

周りで失神するヤツあり（おそらく）トイレへ駆け込むヤツありな状況で山口はついになぞの準液体物に口を着ける！

「………ちよつと——」

全てを言い終わる前に科学室を飛び出した。

すまんな辻よ。

怒ってなさそうだが一応心の中で謝っておく。

辻は付属ん時からの付き合いだがあいつ、怖えからな。

正直彼氏ができるとは思わなかったし。

——えゝまもなく体育館で『怪物たちの舞踏会』が行われます。参加希望者は速やかに体育館へ入場してください——

「もう始まるな。行こうぜ」

んなわけでオレたち4人は一応メインイベントである、『怪物たちの舞踏会』をしに体育館へ向かった。

「結構いるな」

舞踏会なだけあってほとんどが男女のペアで参加している。

男同士や女同士で参加している物好きなヤツらもいるが。

「じゃ、踊るか」

山口たちと別れ、オレはスピカへと手を差し伸べる。

そっぴやドラキュラと黒猫のダンスか。ミスマツチだな。

いや、周りを見れば案外そうでもないか。

「うん。よろしく願います」

その手の上にスピカの温かい手が乗せられる。

「あゝ先に言っておくがオレはこんなの踊ったことねえからな、適当だぞ」

「そっぴやこんな風に踊るのって今までなかったよね。大丈夫、私も初めてだから。リードよろしくね」

「ああ」

そしてオレたちは踊り始めた。

音楽にも合わせることなく非常に独創的なダンスだったがまあ初めてにしてはまあまあだろ。

スピカをくるくる回らせたり、ふわっと持ち上げたりなんやらかんやら……

他のヤツも一部を除いて同じような感じだったし。

まあその間スピカはかなり楽しそうだしオレも楽しいからいいんだけど。

「楽しかったね」

「そうだな」

舞踏会が終わり体育館からわらわらと人が出てくる。

山口たちとはそのまま別れた……っていうかまた集まる予定もなかったが。

そしてメインイベントが終わりそれと同時にハロウィンパーティーもお開きとなる。

今日はHRもないので後は勝手に帰りやがれ状態だ。

「帰りに商店街に寄ってかない？」
「いいぞ」

「こつちも色々やってるねえ」

商店街はハロウィン一色・・・というほどでもないがちらほらとハロウィン独特の飾りが見られる。

「あ、アメ配ってる」

とある菓子店の前でそれぞれ魔女とフランケンシュタイン（耳辺りにネジがあるしそうみられる）

に扮した店員（か？）がガキたちに籠に入ったアメを配っていた。だがガキたちは魔女の方ばかりに集まりフランケンに集まってくるのは極わずかだ。

「もらってくるね」

と言ってオレに鞆を持たせるとたったたと駆けて行き、スピカはフランケンの下へ・・・

スピカが両手を差し出すとフランケンは眼に腕を押し当て泣いているように演じると両手に余るほどのアメ玉を渡した。
よっぽど寂しかったんだろうな。

「はは、いっぱいもらっちゃった♪半分分けてあげる」

「ありがとう」

片手にいくつかのアメ玉を渡され、オレはそれをポケットに突っ込む。

スピカはと言うと早速贅沢にも2個頬張って残りは同じようにポケットに入れた。

「今日のパーティー楽しかったね」

「そうだな」

「これからどこ行く？まだ時間あるよね？」

「ああ・・・スピカの好きなようにすればいいさ。どこへでもつ

いてってやるよ」

「地獄でも？」

いきなりとんでもないこと言いやるな。

「さすがにそれは無理だな。オレは天国へ行く」

「うう・・・どこでもついてくつて言っただけなのにな・・・」

「

「嘘泣きされた仕返しだ。で？い・ま・か・ら・どこ行くんだ」

「昂の傍」

「あ、そ」

腕に抱きつかれたオレはその感触を楽しみながらただ前へと足を運び続けるのだった。

（後書き）

いかがだったでしょうか？

終わり方がどうかনাあって思っただけですけどまあこんなもんでしょ。

実はこれあるサイトのハロウィン企画用に書いたものなんです

こんなん書くぐらいなら『終わりになき闘争曲』の続きを書けって言
うかもしれません・・・

感想&評価待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513c/>

水月学園ハロウィンパーティー

2010年10月10日04時12分発行